

総括報告書

坂上正道

本年度の各分担研究者の研究の成果及び今後の問題点を要約して総括報告書とする。

疫学班では北部九州地域における SIDS 剖検例の検討と死亡統計から見た乳幼児突然死の実態調査とが主に行われた。北部九州地域においてこの1年間に集計された SIDS 症例は総数9例であり、このうち剖検例は8例（法理解剖6例、病理解剖2例）と非常に多く、うち自宅以外の死亡例が5例と多数を占めており、突然死に対する世の中の関心が徐々に高まってきていることが示唆された。

しかし、解剖所見は病理解剖の場合と法理解剖の場合とで形式的ではあるが若干の差が見られ、SIDSとして今後検討する必要性が示唆された。SIDSの発生頻度をより正確に把握するために以下の3つの方法が考慮された。1) 臨床医が実際に経験した症例を集める。2) 司法、病理解剖より集計する。3) 死亡統計より突然死例を集める。以上のどの方法においてもそれぞれ問題点があったが、特に日本の社会生活環境においては未だ剖検診断を得ることが難しいという点が、SIDSの診断を得る場合の最大の障壁となっていることが再認識された。

病態班では呼吸調節中枢の解剖や生理の解明と睡眠のメカニズムの解明とが主に行われた。喉頭や下咽頭からの重要な入力源である上喉頭神経求心系が呼吸中枢に対してどのような影響を及ぼしているかが検討され、上喉頭神経求心線維を刺激すると呼吸中枢ニューロンが抑制されることが判明した。脳幹機能を正確に把握するために、的確かつ客観的な脳幹機能検査法が検討された。光刺激による瞬目反射を定量的に検討することにより、乳幼児期の脳幹機能を比較的簡便に評価することが可能であることが示唆された。また睡眠中の生理についての解明もいろいろな方法でなされた。質量分析計を用いて睡眠中の呼気ガスを分析し、酸素と炭酸ガスのガス交換率が健康成人で検討された。その結果、睡眠時にはガス交換率は低下し、さらにREM睡眠ではNREM睡眠よりガス交換率が悪いことが示唆された。終夜睡眠ポリグラフィーを用いて一卵性双生児（一児は無呼吸が頻発）の睡眠が比較検討されたが、その結果脳幹部機能とより密接に関連する要素が未熟性を示すことが判明し、本検査がSIDSの病因解明に有用であることが示唆された。またJoubert症候群や成人のsleep apnea syndromeの症例における呼吸障害が詳細に検討された。

総合班ではapnea monitorによるホームモニタリングの有効性を検討するために、神奈川県県央、県北部地域におけるpilot studyが計画され一部実施された。前段階として各

種モニター機器の精度などが検討されたが、現時点では携帯型無呼吸モニターが実用的であろうとの結論を得た。また実施に先立ち所轄保健所及び各医療機関との協力関係を確立し、SIDS 児及び未然型 SIDS 児の発生に際しては万全の体制を整えた。来年度はモニターの対象児の数を増すとともに実際的な問題点を拾い上げながらモニタリングの有効性を確立する予定である。

以上の研究成果を礎として本研究を進めれば、本邦における SIDS の実態をより正確に把握することが可能となり、呼吸中枢の異常を中心とした病態を解明することが可能となり、そして臨床に実際に用いる予防指針と予防対策の確立が可能になると考えられた。



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



本年度の各分担研究者の研究の成果及び今後の問題点を要約して総括報告書とする。

疫学班では北部九州地域における SIDS 剖検例の検討と死亡統計から見た乳幼児突然死の実態調査とが主に行われた。北部九州地域においてこの1年間に集計された SIDS 症例は総数9例であり、このうち剖検例は8例(法医学解剖6例、病理解剖2例)と非常に多く、うち自宅以外の死亡例が5例と多数を占めており、突然死に対する世の中の関心が徐々に高まってきたことが示唆された。

しかし、解剖所見は病理解剖の場合と法医学解剖の場合とで形式的ではあるが若干の差が見られ、SIDSとして今後検討する必要性が示唆された。SIDSの発生頻度をより正確に把握するために以下の3つの方法が考慮された。1)臨床医が実際に経験した症例を集める。2)司法、病理解剖より集計する。3)死亡統計より突然死例を集める。以上のどの方法においてもそれぞれ問題点があったが、特に日本の社会生活環境においては未だ剖検診断を得ることが難しいという点が、SIDSの診断を得る場合の最大の障壁となっていることが再認識された。